二〇一一年一二月二四日

地震にはあらず除雪車通り過ぐ　花茗荷
霜ふりの朝採れ野菜無人店　宏虎
屋根一面発電パネル冬日燦　きづな
医者通ひ数へ日なるも休まれず　うつぎ
白菜の浅漬けあれば足る昼餉　はく子
募金呼ぶ僧声太き師走寺　なつき
持ち寄りの手づくり菓子でクリスマス　満天
草の戸を出でて聖夜の星仰ぐ　菜々

二〇一一年一二月二三日

ぷかぷかと柚子の遊べる終ひ風呂　きづな
大白菜に立ち向かふごと刃を入るる　はく子
鱈捌く男料理のコップ酒　花茗荷
池の面の山影乱し鴨翔ちぬ　よし女
シリウスの青さいや増す霜夜かな　有香
刃を拒む冬至南瓜を攻めあぐむ　とろうち
被災地へ届けと点す聖樹の灯　こすもす
電飾に並木の枯れ木目覚めけり　はく子
手袋を外して握手また握手　つくし
山の灯の星と瞬く聖夜かな　うつぎ

二〇一一年一二月二二日

荘厳の三尊ゐまし堂冴ゆる　雅流
あんなことこんなことあり日記果つ　こすもす
暮れきらぬ通りに聖樹灯点りぬ　きづな
ドリーネは台地の笑窪冬ぬくし　三刀
冬帽子取りて翁の碑に見ゆ　百合
煤逃げの人らに茶房賑はへり　はく子
雪片のひっかかりたる枝の先　せいじ
臥す母とともに聖夜を誉め唄ふ　菜々
風花す五百羅漢の福耳に　宏虎
こころ許なきほど淡し冬ざくら　よし子

二〇一一年一二月二一日

柚子風呂に明日のだんどり思考中　満天
鳰の翳消えては現るる鏡池　三刀
群雀羽根膨らませ日向ぼこ　せいじ
教会に自転車並ぶ聖夜かな　つくし
雲水の笠より漏るる息白し　花茗荷
ふぐ刺しに鰭酒所望な咎めそ　雅流
冬麗や濃き山影を野に落とし　よし女
クレーンの天辺聖夜星めきぬ　うつぎ
がんばろう日本と幟枯れ木中　こすもす

二〇一一年一二月二〇日

路地隔て托鉢僧と社会鍋　うつぎ
野仏の掌に積む玉霰　花茗荷
柚子風呂に瞑想せるが我が至福　宏虎
メモ書きは吟行予定古暦　ぽんこ
忘年会親し俳号呼びあひて　菜々
海を見る枯野の端に腰下ろし　三刀
紛れなき逆さ金閣池冴ゆる　ともえ

二〇一一年一二月一九日

通夜の道青く煌めく冬銀河　三刀
冬ざれの島の西浦波しぶく　うつぎ
雪吊りの男結びに気迫あり　宏虎
風よけの高き石垣冬菜畑　きづな
冬天の富士に欠けたる処なし　とろうち
日溜まりに半眼をしてかじけ猫　百合
山寺の和尚も被る冬帽子　よし子

二〇一一年一二月一八日

町師走乗合バスにちんどん屋　百合
引き戸より猫の手が出て隙間風　有香
主婦業の我もボーナス頂きぬ　はく子
朝一の道除雪車が先導す　こすもす
冬晴れの日の目つぶしや朝戸繰る　治男

毎日句会みのる選・二〇一一年一二月二七日